

こんなものを読んできた(11)

～ジョン・スコルジー「老人と宇宙」シリーズ ハヤカワ SF 文庫～

校長・鈴木 健

数百年後の未来、人類は、20～21世紀の科学・文明レベルが保存された地球と、宇宙に進出し異星人と激しい生存競争を繰り広げているコロニー連合の2つに分かれて生活しています。異星人との戦争で兵員を必要とするコロニー連合は、地球の老人たちに若返りと兵役後の宇宙植民地での第2の人生と引き換えに、軍隊への志願を呼び掛けていました。長年連れ添った妻と死別したジョン・ペリーも宇宙での生活を求めて、コロニー連合軍に入隊しますが、そこに待っていたのは想像を絶する地獄でした。ペリーは独創的な発想で戦果をあげていきますが、過酷な戦闘に心身ともに消耗していきます。ある日重傷を負ったペリーは、死んだ妻とそっくりの女性兵士と出会って…。というのがこのシリーズの枠組みです。

生徒向けには表紙の
写真が入ります。

このシリーズの初めの方は、未来の軍事技術による戦闘シーンを売り物とするハードSFでした。何しろコロニー連合が戦う異星人たちは、地球人を見ると食欲を感じるような連中です。知性と文明をもち、翻訳可能な言語を使っているのですが、対話も交渉も成立しません。地球人からすると、相手を殲滅するか、自分が食べられてしまうかの2択しかないという、絶望的な状況です。

ところがシリーズが進んでいくと、次第に雰囲気が変わってきます。コロニー連合に裏切られ、異星人に味方する地球人が出てきたり、異星人の側にも信義を重んじる軍人や、平和を求める外交官が出てきたりします。また、異星人たちが一定の秩序を作っていた宇宙に、あとから強引に割り込んだのは地球人の方であるということもわかってきます。そしてこのまま戦いを続ければ、いずれ地球人は絶滅するという状況が明らかになりますが、一方で異星人と共存する道もあるのではないかと、という希望も見えてきます。

これは何か作者の心境に変化があったのでしょうか。もしかしたら、小説とはいえ登場人物たちに無慈悲な殺戮を続けさせることに疲れたのかもしれない。

さて、ここで現在の我々の現実です。

私は1963年の生まれで、20世紀と21世紀の境界をまたいで生きてきました。私が若かった20世紀後半には、世界は資本主義の陣営と社会主義の陣営の「冷戦」の下にありました。しかし一方では、「世界中の人々は差別や偏見を乗り越え平和のために歩み寄るべきである」という価値観は共有されていたと思います。

20世紀末に冷戦が終わった時、人々はこれからの世界は平和になると期待しました。しかし今日の21世紀の世界では、大国が小国に領土欲をむき出しにして、戦争を仕かけたり圧力をかけたり、まるで18世紀か19世紀に戻ってしまったような状況が続いています。この辺りは、本当にどうにかならないものでしょうか。いい加減、人間同士が争ったり殺しあったりすることに、飽きたり疲れたりしてもいいころだと思えるのですが。